

モンゴルならびに中国の遺跡で出土した 漢代並行期のガラス容器 (資料集成)

大谷育恵

(日本学術振興会特別研究員 PD)

I. はじめに

中国の古代ガラスについては、すでに多くの先行研究が出されている。特に西周～戦国時代の中国の古代ガラスについては、組成や同位体比の分析からその起源が注目されてきており、その後の漢代のガラス資料についても、また交易を裏付ける資料として東西交渉史の観点から関心が高い。ガラス研究としては対象資料を容器に限定してしまうと意味を持たないが、著者の関心は交易の方にあり、漢代の南海交易に関する考古資料集成の一環としてガラス容器の集成を試みる。漢墓出土のガラス容器については、これまでに由水 [1992]、齊東方 [2001]、熊・李 [2011] 等が網羅してきている。しかし考古学関係の雑誌上のみならず断片的に情報がある資料も若干ながら存在し、また同時期の資料として、モンゴル国に所在する匈奴墓で近年新たな発見があったことが注目される。そこで本稿では、漢代並行期のモンゴル国と中国の遺跡におけるガラス容器の出土状況を再度整理したい¹⁾。

II. 中国

1. 満城 1 号漢墓 (中山靖王劉勝墓) 河北省保定市満城県 前漢 [113 BCE 頃]

満城漢墓は石灰岩の岩山である陵山を掘りぬいて作った崖洞墓で、1968 年に発見・発掘調査された。1 号墓の被葬者は、初代の前漢中山国王である靖王劉勝に比定されている。1 号墓は主室、中室、そして甬道の左右に設けた耳室各 1 室から構成されている。ガラス容器は盤 1 点と耳杯 2 点の合計 3 点で、盤の上に 2 つの耳杯が置かれた状態で出土した。

盤 (M1:5124) は、「翠緑色、わずかに光沢があり、半透明で、玉のような光がある。一部が土によってアルカリ腐食し、乳白色の斑点痕跡をみせる。出土時すでに破損していた。口は開き、水平に折れた口縁部、腹部は浅く段があり、外見上高台部分があるかのように底を作っている。高さ 3.2cm、口径 19.7cm、底径 9.5cm、器壁の厚さ 0.3cm」で

ある。耳杯 2 点は、「材料と色は盤と相同。器は楕円形で、両側に耳が付き、耳はやや上向きで、外見上低い高台部分があるかのように底を作っている。M1:5122 は高さ 3.4cm、長さ 13.5cm、幅 10.4cm」である [中国社会科学院考古研究所ほか 1980:212-214]。3 点はいずれも鉛バリウムガラスで、パート・ドヴェール²⁾の技法で製作されている [由水 1992:251]。

2. 北洞山漢墓 江蘇省徐州市 前漢前期 (偏晩)

石灰岩の岩山を掘り抜いて作った崖洞墓で、石材切り出しによる破壊を受けてきたため、1986 年に調査された。最初の簡報 [徐州市博物館ほか 1988] で玉杯と記載されている遺物について、ガラスであると後に指摘され [李銀徳 1990]、また近年報告書が刊行された [徐州市博物館ほか 2003]。

淡緑色の杯は 16 点 (6103~6116, 6133, 6134) ある。「そのうち 2 点は完形に近く、共に北洞山漢墓に付属する第 5 室の東部で出土した。少数の残片が甬道の堆積土中から出土した。杯身は筒形、口は水平で、器壁は直立し、平底である。外表は非常に滑らかで艶があり、光沢があるが小さな気孔がある。内壁はややざらざらし、比較的大きな気孔がある。」 [李銀徳 1990:109]。杯身の中^{たが}部と底近くに 3 本の金属箍の痕があり、上から箍の幅は 0.7 ~ 0.9cm、1.2 ~ 1.3cm、0.8 ~ 1.0cm。各箍の上下には幅 0.1cm の朱圈があり、また底部縁から 0.4cm の所に幅 0.4cm の朱圈がある。このことから、元来は箍と三足の鍍金金具のついた^{たが}厄であったのではないかと推測している [徐州市博物館ほか 2003:132-133]。

3. 横枝崗 1 号墓 広東省広州市 前漢中晩期

1954 年に調査された木槨墓である。槨は痕跡のみを残して腐朽しており、ガラス碗 2 点とガラス壁 1 点が槨付近で出土し、さらに 1 点の碗が墓室北部で出土したという。

報告によると、ガラス碗は「3 点。出土時に砕けて小片塊となったが、復元後はほぼ完形である。深藍色。広口、丸い腹部、平底、口縁下に凹線がめぐり。内壁は鏡の如く光り輝き、外壁は磨きがかけられている。3 点の大きさはほぼ同じで、口径 10.6cm、底径 4 cm、器壁の厚さは 0.3cm。」 [広州市文物管理委員会 1955:45]。報告に掲載されている写真は 1 点のみである。

4. 陳棚村 68 号墓 (M68:27) 河南省南陽市宛城区

前漢晩期

2001年に土地開発に伴う探査により発見され、発掘調査された。68号墓は平面長方形の竪穴土坑墓で、一棺一槨であった。副葬品の多くは棺と槨の間の空間に置かれ、ガラス碗もここで出土している。

報告によると、ガラス碗は「無色透明。口部は真っ直ぐ上に立ち上り、口縁は丸く、腹部は深く弧をえがき、平底。口縁外側に2周の凹線がめぐり。口径6.2cm、底径3cm、高さ3.4cm」である[河南南陽市文物考古研究所2001:38]。この資料是北京大学考古文博学院科技考古研究室でICP発光分光分析法によって分析されており、カリガラス(K₂O-SiO₂)系のガラスと報告されている。

5. 文昌塔70号墓 (M70:52) 広西チワン族自治区北海市合浦県 前漢晩期

1987年に発掘された平面形が長方形の土坑墓からガラス杯1点が出土している。ガラス杯は「口が窄まり、腹部で屈折し、底がやや内にくぼむ。腹部中部には2本の圈線がめぐり。半透明、淡青色。口径7.4cm、高さ5.2cm」。エネルギー分散型X線分析の結果、カリガラス(K₂O-SiO₂)系のガラスと判断されている[黄啓善1992:46]。

6. 紅嶺頭11号墓 広西チワン族自治区北海市合浦県 前漢晩期

1988年に合浦県博物館によって緊急発掘された墓である。ガラス碗が2点出土しており、合浦県博物館蔵資料(藏品番号000627と000628)である[熊・李2011:48]。このうち1点(おそらく後者000628に該当)は、「深藍色、丸い底。高さ6.8cm、口径9.2cm」である[熊・李2001:29]。

7. 紅嶺頭34号墓 (M34:1) 広西チワン族自治区北海市合浦県 前漢晩期

1988年に発掘された長方形の木槨墓からガラス杯1点が出土している。ガラス杯は「口が窄まり、器は深く、底は内に窪む。腹部に3本の凸線文がめぐり。藍色で半透明である。口径9.2cm、高さ6.8cm」⁽³⁾[黄啓善1992:46]。

8. 堂排3号墓 広西チワン族自治区北海市合浦県 前漢晩期

1975年に堂排で調査された4基の長方形竪穴木槨墓のうちの1基である。調査簡報の最後に付された表の中に記載があるのみで詳細な情報はないが、3号墓でガラス碗が出土しているという[広西チワン族自治区文物工作隊1981:56]。

9. 深釘嶺12号墓 (M12:17, 34) 広西チワン族自治区貴港市 前漢晩期

1991年に道路建設に伴って深釘嶺付近で発見発掘された墓のうちの1基で、傾斜する墓道(斜坡道)を持つ平面長方形の土坑木槨墓である。2点のガラス杯(M12:17, M12:34)が出土しているが、報告中で詳述されているのは後者1点のみである。

ガラス杯M12:34は、「深藍色、広口で、腹部は弧状で、平底。腹部には4本の凸線文がめぐり。口径6.2cm、高さ4.2cm」[広西チワン族自治区文物工作隊ほか2006:107]。

10. 黄泥崗1号墓 広西チワン族自治区北海市合浦県 後漢早期

1990年に合浦県博物館によって緊急発掘された墓である。地面に磚を敷いてその上に木槨を設けた磚木併用構造の墓である。豊富な副葬品が出土し、ガラス碗1点の外に「徐聞令印」滑石製冥印、「陳褒」亀鈕銅印が出土し、被葬者は生前合浦郡徐聞郡令であった陳褒という人物であると推測されている[熊・李2011:47-48]。

ガラス碗は「腹部器壁は斜めに直立する。直立する丸い口縁で、口はやや開き、腹上部は直に近いが腹下部は弧をえがき、内に窪む平底になる。腹部には3本の凸線文がめぐり。内外面に加工が残した細い周線文が見られ、比較的密で、間隔は1mm以下、線のめぐりは不連続で途切れがある。底部は平滑で、密な同心円文がある。青色、半透明、小さな気孔が多く、傷痕が多く箇所で見られる。口径9.2cm、高さ3.8cm。」[熊・李2011:66]。

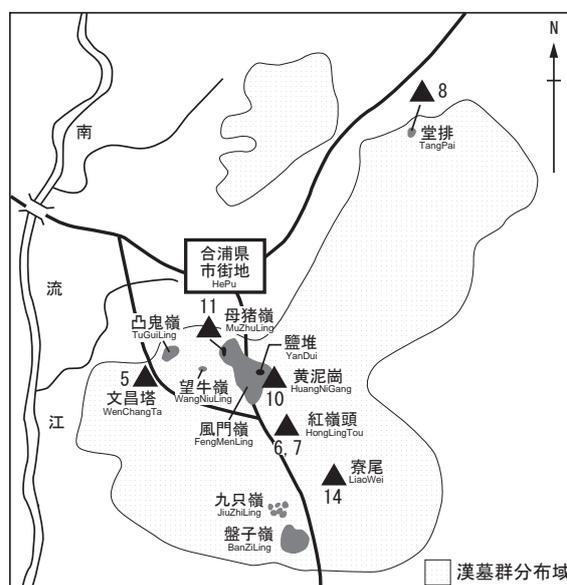
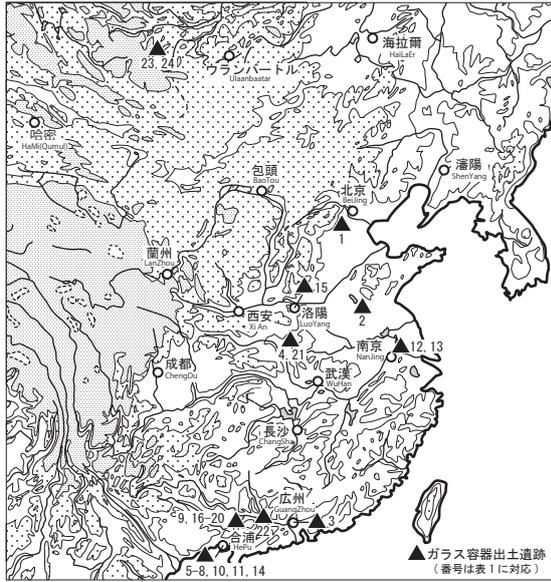


図1 合浦県周辺の漢墓分布図



23-1. ゴル・モドⅡ墓地 1号墳 (1号碗)
Gol Mod II, Kurgan 1



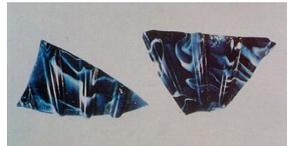
24. ゴル・モドⅡ墓地 1号墳第30号衛星墓
Gol Mod II, kurgan №1, satellite tomb №30



23-2. ゴル・モドⅡ墓地 1号墳 (2号碗)
Gol Mod II, Kurgan 1



2. 北洞山漢墓 (6103.6104)
BeiDongShang



12. 双山 2号墓 [67 CE]
ShuangShan, tomb №2



1-1. 滿城漢墓 M1:5122 [113 BCE]
ManCheng, tomb №1



15. 洛陽機車二廠漢墓
LuoYang JiChe ErChang



1-3. 滿城漢墓 M1:5124 [113 BCE]
ManCheng, tomb №1



4. 陳棚村 68号墓 (M68:27)
ChenPengCun, tomb №68



21. 南陽大学 25号墓
NanYang university, tomb №25



5. 文昌塔 70号墓 (M70:5)
WenChangTa, tomb №70



6-2. 紅嶺頭 11号墓
HongLingTou, tomb №11



7. 紅嶺頭 34号墓 (M34:1)
HongLingTou, tomb №34



9-1. 深釘嶺 12号墓 (M12:34)
ShenDingLing, tomb №12



10. 黄泥崗 1号墓
HuangNiGang, tomb №1



16. 貴州火車站漢墓
HuoCheZhan (The railway station at Gui-xian)



14. 寮尾 14号墓 (M14: 掇 34)
LiaoWei, tomb №14



18-1,2. 南斗村 8号墓
NanDouCun, tomb №8



3. 横枝崗 1号墓
HengZhiGang, Tomb №1



17-1. 貴州汽車路 5号墓
QiCheLu, tomb №5



17-2. 貴州汽車路 5号墓 (M5:4)
QiCheLu, tomb №5



11. 母猪嶺 1号墓
MuZhuLing, tomb №1

図 2 ガラス容器 (1)

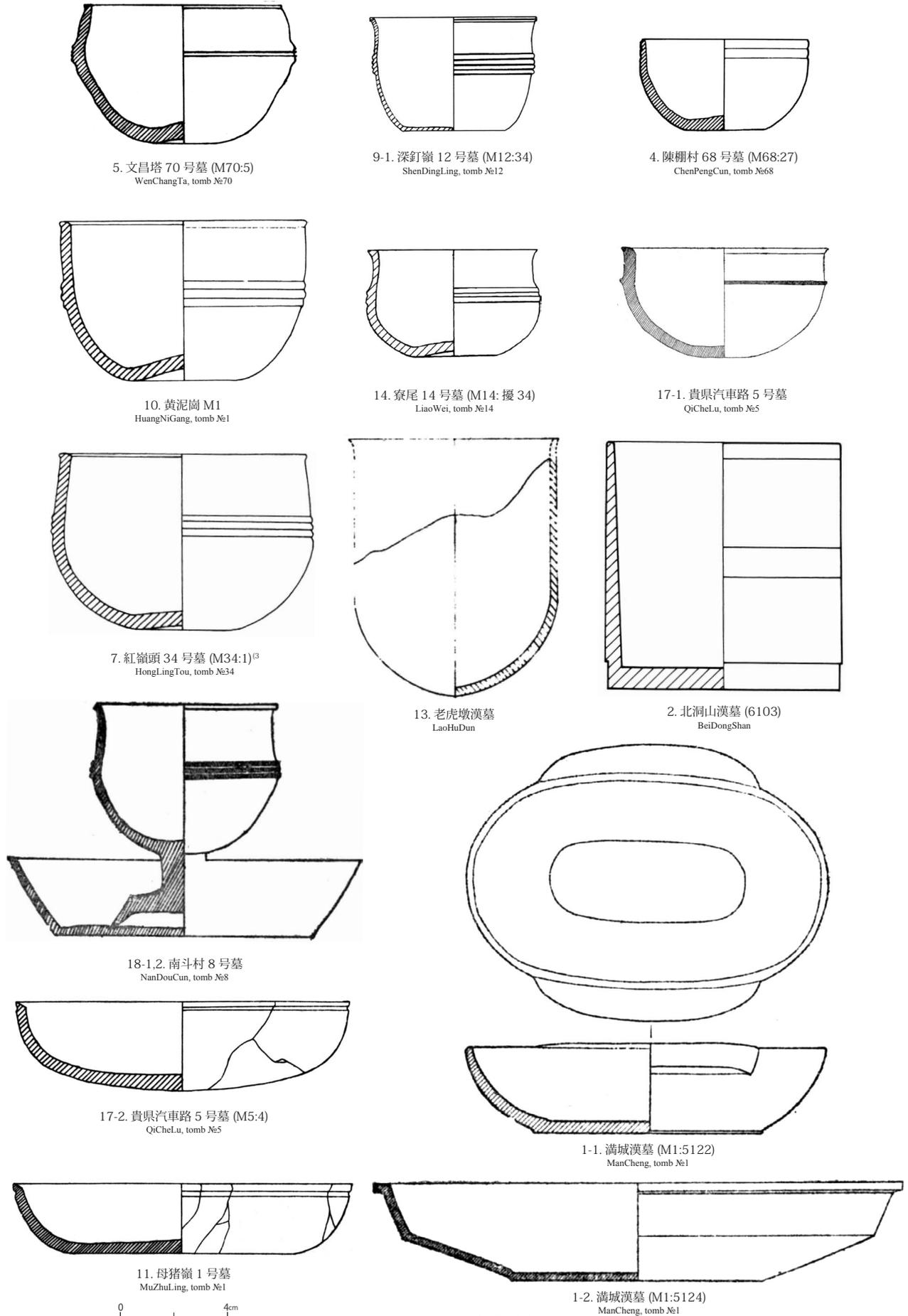


図3 ガラス容器 (2)

11. 母猪嶺 1 号墓 (M1:30) 広西壮族自治区北海市
合浦県 後漢早期

1988 年に合浦県博物館によって緊急発掘された墓である。墓は平面形が長方形の磚槨土坑墓で、ガラス盤 1 点が出土した。ガラス盤は、「口が開き、深さは浅く、丸い底である。口縁に沿って一本の線がめぐり、内面底には使用してすり減った痕が残っている。器壁は厚く、コバルト色で、半透明。口径 12.7cm、高さ 2.5cm。」[黄啓善 1992:47]。

12. 双山 2 号墓 (甘泉 2 号墓) 江蘇省邗江県 後漢 永平 10 年 [67 CE]

直径約 60m、高さ約 13m の封土をもっていたと推測される大型の漢墓である。墓は磚築で、墓室全体の平面形は正方形である。墓室の中ほどには 3 列の並列する磚積隔壁を設け、墓室壁に沿って 3 方が回廊、墓門側が墓室前部、隔壁間が東西棺室となっている。墓室は早い時期に盗掘されて出土遺物は多くなかったが、「広陵王璽」金印と有銘の雁足灯が出土し、墓主は永平 10 年に自殺した広陵王劉荆と推定されている。

ガラス片は 3 点出土している。「元は平底の鉢、盆の類の器であった。ガラス片は紫黒色と乳白色の透明体の一つおきの交互になっており、その文様は 2 種類の違う色のガラスをペースト状に溶かし、その後混ぜて出来たようである。器は型押しで作られ、外壁には型押しの輻射状凸稜が飾りのようについている。」[南京博物院 1981:8]。

13. 老虎墩漢墓 江蘇省邗江県 後漢中期

該墓所在地付近でレンガ窯が建設された際に封土版築が確認され、1984 年になって土取り中に墓室が発見されたことから発掘調査が行われた。墓は磚築で、内部構造は甬道両側に左右耳室があり、墓室は前室と後室に分かれた平面 T 字形の墓室である。早い時期に盗掘を受けていた。

前室からガラス杯 1 点が出土しており、報告によると、「破損している。残片からみると杯は広口で、円柱状の体部、球形の底である。表面は風化しているものの断面は翠緑色を呈する。口径約 7.8cm、残高 9.2cm」[揚州博物館 1991:66]。老虎墩漢墓は甘泉 2 号墓と同じく漢代諸侯王とその家族墓地が分布する甘泉山付近に位置することから、最後の広陵王である劉荆以降のいずれかの広陵侯あるいはその重臣の墓と推定されている [同 :70]。

14. 寮尾 14 号墓 (M14: 擾 34) 広西壮族自治区北海

市合浦県 後漢晚期

2008 年から 2009 年にかけて、該当地域の開発に伴って 34 基の墓が発掘調査された。14 号墓は平面長方形の墓室とその左右に 3 つの側室を持つ磚室墓である。複数回の盗掘を受けていた⁴⁾。

破損したガラス碗 1 点が出土しており、「口は直に立ち、口縁端は平らで、深さがあり弧をえがく腹部、平底でやや内にへこむ。腹部に 2 本の凸弦文を飾る。口径 6.2cm、腹径 6.4cm、底径 3cm、高さ 3.9cm。」[広西文物考古研究所 2012:530]。

15. 洛陽機車二廠出土 河南省洛陽市 後漢

1987 年に洛陽東郊で出土した資料である。「吹きガラスで製作し、表面は風化がひどく、瓶の底部から口に伸びる白色の螺旋状の線文がある。高さ 13.6cm、口径 4cm、腹径 7.5cm」[齊東方編 2001:398]。

16. 貴州火車站漢墓 広西壮族自治区貴港市 後漢

1957 年に調査された墓で碗 1 点が出土している。碗は「広口、口縁は屈折し、まっすぐの腹部、淡緑色、透明。腹部に 2 本の弦文がめぐり、型入れ形成している。杯の高さは 3.2cm、口径 5.8cm」[黄啓善 1988:267]。製作について由水は、型押し形成したガラスを削り出して器形および横帯文を作り出したとの見解を示している [由水 1992:251]。

17. 貴州汽車路 5 号墓 広西壮族自治区貴港市 後漢

1955 年に発掘された土坑墓で、ガラス盤とガラス杯の 2 点が出土した。ガラス盤 (M5:4) は「口が開き、深さは浅く、丸い底である。青緑色で、半透明である。比較的多く気泡を含む。口径 12.7cm、高さ 3.4cm」。エネルギー分散型 X 線分析の結果、カリガラス (K_2O-SiO_2) 系と判断されている [黄啓善 1992:47]。

18. 南斗村 8 号漢墓 広西壮族自治区貴港市 後漢

1957 年に出土した資料である⁶⁾ [黄 1988:266]。高足杯と盤からなる。「杯は口が開き、深さがあり、外面腹部に 2 本の凸弦文を飾り、円形の細い脚、ラッパ形の台である。盤は内面底部に円形のくぼみがあり、高足杯の台を入れることができる。全体は透明、淡青色、微細な氷裂状の筋が入る。杯は高さ 8.3cm、口径 6.4cm、台径 5.5cm。盤は口径 12.2cm、足径 9cm。盤付き高足杯の杯器壁厚はわずか 0.1cm で、黄啓善は吹きガラスとするが、安家瑤は同心円に近い研磨細痕が非常にはっきりしていることを観察で

発見しており、型入れ形成した後に磨きをかけたことが確実である」[熊・李 2011:68]と見解が分かれている。由水も写真からの観察から黄啓善の見解に疑問を呈しており、型押し形成したガラスを削り出して器形および横帯文を作り出したとする[由水 1992:252]。

19. 1954 ~ 1955 調査貴州城郊漢墓 広西壮族自治区貴港市 後漢

貴州郊外では 1954 年から 1955 年にかけて 129 基の漢墓が発見され、5017 件の副葬品が出土した。副葬品の 1 つとして破損した碗が 1 点出土したと記載されている[広西省文物管理委員会:161]。

20. 風流嶺 2 号墓 広西壮族自治区貴港市 後漢

1977 年に出土した⁶⁾。ガラス容器は高足杯と碗の 2 種類がある。杯はひどく破損していたことにより復元できないが、淡青色で透明である。碗は藍色、半透明で、ひどく破損しているため復元できない[黄啓善 1988:266-267]⁷⁾。

21. 南陽大学 25 号墓 河南省南陽市 漢

河南省内の文物関係機関の協力の下に河南博物院で 2004 年に開催された「考古碩果 建設豊碑—河南重点項目と基本建設 考古成果展」に展出された資料である。淡青色の杯で、近年南陽で発見された資料という[李琴 2004:88]。

22. 梧雲 3 号墓 広西壮族自治区梧州市 漢

詳細な情報はないが、破損した乳白色のガラス碗が出土しているという[黄啓善 1988:267,274]。

III. モンゴル国

23. ゴル・モド II 墓地 1 号墳 (Гол мод-II, 1-р язгууртны булш) アルハンガイ^{アイマク}オンドル-オラーン^{ソム}郡 (Архангай аймаг, Өндөр-Улаан сум) 匈奴期

ゴロ・モド II 墓地は蒙米共同「モンゴル古代牧畜経済—ハヌイ溪谷」調査団によって 2001 年に発見され、墓地の測量調査を経て 2002 年より発掘調査が続けられてきている。1 号墳は 188 基が分布する同墓地最大の墓で、墓道を有する方形墳である。

ガラス容器は 2 種類 17 点の破片が出土している⁸⁾。1 号碗は、口縁部、底部、腹部の 15 点の破片がある。「破片は普通に見ると淡灰色だが、光をあてると暗紅

色である。口の下部に細線がめぐる。底中心下面に小さな円形の痕跡がある。口の下部から底部までリブ装飾があり、間隔は底部で収束し集まる。碗の口径は 12cm」。2 号碗は「ガラス碗の 2 片で、青と白の混ざった破片が出土し、同様にリブ文様のあるガラス碗であることは明らかだが、1 号碗とは異なる工芸技法で、いくつかの異なる色のガラスを混合したことが観察される。碗口径は直径 13cm」[エルデネバートルほか 2015:179]。

24. ゴル・モド II 墓地 1 号墳 第 30 号 衛星墓 (Гол мод-II, 1-р язгууртны булш, 30-р дагуул булш) 同上

1 号墓に伴う陪葬墓のうち、東側に独立した場所を占める第 30 号墓衛星墓でガラス碗 1 点が出土している。「この碗は青色で、白い模様がある。文様はガラス碗制作中の熱いうちに白い文様を回し流し、末端を碗の底に回し付けて終えている。碗の全体形は口径 7.5cm、直に立ち上がる口を持ち、腹が張り、張り出した腹部分にガラス碗が熱いうちに圧迫し、リブを作って装飾している。張り出した部分は直径 10cm、高さ 7cm、非常に薄いガラス碗である。碗の厚さは 1mm。250ml の液体が入る容量がある⁹⁾」[エルデネバートルほか:44]。

IV. おわりに

以上において漢代並行期のモンゴル国と中国の遺跡におけるガラス容器の出土状況を整理してきた。特に、図 1 で提示したように合浦県近郊に分布する漢墓で集中的に資料が出土していることを提示した。漢代の南海交易に関連する考古資料としては、ガラスの他に玳瑁、象牙、金銀製品が挙げられる。考察対象を増やして行きたいと考えている。

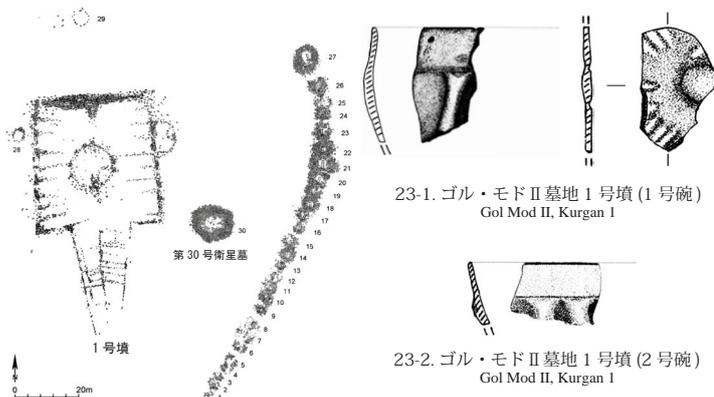


図 4 ゴル・モド II 墓地 (縮尺不明)

表 1 ガラス容器一覽表

遺跡名	器形	写	図	年代	PHO-BaO-SiO ₂	SiO ₂	PbO	BaO	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O	CuO	MnO	その他成分	出典	備考	
1 滿城漢墓 M1:5122	耳杯	○	○	前漢 [113 BCE]	PHO-BaO-SiO ₂													中国社科院考古研究所ほか 1980		
2 滿城漢墓	耳杯				PHO-BaO-SiO ₂														中国社科院考古研究所ほか 1980	
3 滿城漢墓 M1:5124	皿	○	○		PHO-BaO-SiO ₂														中国社科院考古研究所ほか 1980	
2 北洞山漢墓	杯	○	○	前漢前期偏晚	PHO-BaO-SiO ₂	34.66	39.25	16.23	1.48	0.11	0.42	0.10	0.11	3.65	0.1	-	Cl 1.44	李銀德 1990; 徐州市博ほか 2003	註 10	
1 橫枝崗 M1	碗	○		前漢中晚期	PHO-BaO-SiO ₂	34.40	39.51	15.84	1.56	0.13	0.36	0.10	0.18	3.57	0.10		Cl 1.60	徐州市博物館ほか 2003	註 11	
2	碗				K ₂ O-CaO-SiO ₂													范・周 1983		
3	碗																			
4 陳棚村 M68:27	碗	○		前漢晚期	K ₂ O-SiO ₂	82.12		0.02	2.14	0.34	0.00	0.41	12.18	0.66	1.91	0.05	TiO ₂ 0.15, SrO 0.02	河南省南陽市文考研所 2008		
5 文昌塔 M70:52	碗	○	○	前漢晚期	K ₂ O-SiO ₂	79.69			2.14	1.36	0.41	0.01	16.22		0.22		黄啓善 1992			
1 紅領頭 M11:21	碗			前漢晚期	K ₂ O-SiO ₂	73.69			5.68	0.73	0.66	0.66	16.51	1.58	0.25	0.69		黄啓善 1986; 熊・李 2011		
2 紅領頭 M11	碗				K ₂ O-SiO ₂	74.62				5.36	0.71	0.68	0.41	16.01	1.56	0.64		黄啓善 1986; 熊・李 2011		
7 紅領頭 M34:1	碗	○	○	前漢晚期	K ₂ O-SiO ₂													NHK 大阪放送局編 1992		
8 堂排 M3	碗?	-	-	前漢晚期																
1 深釘嶺 M12:34	碗	○	○	前漢晚期																
2 深釘嶺 M12:17	碗																			
10 黄泥崗 M1	碗	○	○	後漢早期 (新莽?)	K ₂ O-SiO ₂	78.29			1.99	0.56	0.12		17.28		1.67			黄啓善 1986		
11 母猪嶺 M1:30	盤	○	○	後漢早期	K ₂ O-SiO ₂													NHK 大阪放送局編 1992		
12 双山 M2 (甘泉 M2)	破片	○		後漢 [67 CE±]	Na ₂ O-CaO-SiO ₂	64.29			3.44	1.30	7.66	0.61	0.88	18.18	0.03	2.45		揚州博物館 1991	註 12	
13 老虎墩漢墓	碗	○	○	後漢中期	Na ₂ O-CaO-SiO ₂	68.37			1.76	0.61	4.62	0.79	0.48	16.01	2.88	0.58		揚州博物館 1991		
14 蔡尾 M14: 攪 34	碗	○	○	後漢晚期																
15 洛陽機車二廠漢墓 (洛陽東郊漢墓)	瓶	○		後漢																
16 貴県火車站	碗	○	○	後漢	K ₂ O-CaO-SiO ₂	+++					+++							范・周 1983; 黄啓善 1988		
1 貴県汽車路 M5	碗	○	○	後漢	K ₂ O-SiO ₂													黄啓善 1988; NHK 大阪編 1992		
2 貴県汽車路 M5:4	盤	○	○		K ₂ O-SiO ₂	77.70				3.17	0.78	-	-	16.80	1.62			黄啓善 1992; 熊・李 2011; NHK 大阪編 1992		
1 南斗村 M8	盤	○	○	後漢	K ₂ O-SiO ₂													NHK 大阪放送局編 1992		
2 南斗村 M8	高足杯	○	○		K ₂ O-SiO ₂														NHK 大阪放送局編 1992	
19 1954-1955 貴県城郊出土	破片 (碗?)	-	-	後漢																
1 風流嶺 M2	高足杯	-	-	後漢	K ₂ O-SiO ₂	76.28			3.28	0.47	0.54	0.45	15.43	0.27	0.01		TiO ₂ 0.17, Cl 0.1, P ₂ O ₅ 0.22	黄啓善 1986; 干・黄 1986; * 黄啓善 1988; * 熊・李 2011	註 13	
2 風流嶺 M2	杯	-	-		K ₂ O-SiO ₂	74.94				4.60	0.60	0.03	0.18	15.99	0.16	1.52		黄啓善 1986; 干・黄 1986; * 黄啓善 1988; * 熊・李 2011	註 13	
21 南陽大学 M25	碗	○		漢代																
22 梧雲 M3	碗?	-	-	記載なし																
1 古ル・モド II 1号墳 (1号碗)	碗	○	○	匈奴期																
2 古ル・モド II 1号墳 (2号碗)	碗	○	○																	
古ル・モド II 1号墳 (3号碗)	碗	○	○																	
24 墳第 30 号衛星墓	碗	○	○																	

註

- 1) 新疆維吾爾自治區の遺跡出土資料については後漢～魏晉期と考えられる資料も存在するが、それらについてはカットグラスとの関係から魏晉南北朝期の資料集成に含め、本稿では言及していない。
- 2) 文昌塔漢墓の報告書が刊行され [廣西文物保護與考古研究所編著 2017]、70 号墓についても報告されているが、ガラス碗の出土に関する記述はない。理由は不明。
- 3) 紅頭嶺 M34:1 の実測図は黄啓善 [1992] (p.46 図 1-2) と熊・李 [2011] (p.67 図 7-2) に掲載があるものの、両者は異なっている。報告の記述も簡単でどちらが正確であるか判断できないが、写真を参考に図 3 では熊・李 [2011] を掲載した。
- 4) 遺物番号に「擾」(乱れるの意) がついており、攪乱を受けた状態で出土したと考えられる。
- 5) 南斗村 3 号墓出土と記載する資料と 8 号墓出土と記載する資料の 2 つがあるが、熊・李 [2011] に従い 8 号墓と判断した。また、黄啓善 [1988] の本文では遺跡名を「南頭村第 1 号東漢墓」と誤記している (同論文の表中表記の方が正しい)。
- 6) 黄啓善論文 [1988] では高足杯の記載部分に 1987 年貴州風流嶺第 2 号漢墓出土とあるが、1977 年の誤記と判断した。
- 7) 黄・李共著は風流嶺 2 号墓出土の高足杯の図版を掲載しているが [2011:67, 図 7-8]、これは広西壮族自治区欽州市に所在する久隆 1 号隋唐墓出土杯と取り違えている (参照: 黄 [1988:267])。
- 8) 報告では 1 号墓より 16 点の破片が出土したと記載がある一方で、個別の碗については 1 号碗は破片 15 点 (15 xaraxай)、2 号碗は破片 2 点 (хоёр ширхэг) と記載しており数が合わない [エルデネバートルほか 2015:179]。報告に掲載された写真には 1 号碗の破片 15 点、2 号碗の破片 2 点が掲載されているので、合計 17 点とした (図 2 掲載の 1 号碗は別のカットのものを使用したため 11 点しか写っていない)。
- 9) 原文は「250g」とあるが ml の誤り。リップ文様は型に入れて付けたのではないかと考え「圧迫し」の語を選択したが、筆者はつまみ出していると考えている可能性もある (図録 [エルデネバートル 2016:41] の英文解説では「the cup was pinched when hot for raising vertical decorative ridges」の語を用いている)。
- 10) 資料番号: ガラス杯破片 1(WHG-1)。
- 11) 資料番号: ガラス杯破片 2(WHG-2)。また表 1 に掲載していないが、WHG-2 風化物も測定されている。
- 12) 干・黄 [1986]、由水 [1992] では SiO₂ の値のみが 64.79 と異なる記載になっている。

- 13) 黄啓善 [1986]、干・黄 [1986] と黄啓善 [1988] とでは測定値が異なっている (表 1 には*を付した文献の数値を記載した)。

参考・引用文献

<日本語>

- NHK 大阪放送局編 1992 『正倉院の故郷—中国の金・銀・ガラス—展』
 曾布川寛・谷豊信責任編集 1989 『世界美術史大全集』東洋編 第 2 卷 秦・漢 小学館
 谷一 尚 1983 「江蘇省邗江県出土のモザイクガラス—漢代ガラスとその出自—」『日本オリエント学会創立三十周年記念オリエント学論集』刀水書房
 谷一 尚 1984 「中国出土の古代ガラス (一) 両周・両漢—最近の出土例を中心に—」『MUSEUM』397 東京国立博物館
 増田精一 1964 「漢代のガラス容器」『MUSEUM』154 東京国立博物館
 由水常雄 1972 『ガラスの道』徳間書店
 由水常雄編 1992 『世界ガラス美術全集』第 4 卷 中国・朝鮮 求龍堂

<中国語>

- 広州市文物管理委員会 1955 「広州市東北郊西漢木槨墓発掘簡報」『考古通訊』1955-4
 広西省文物管理委員会 1957 「広西貴州漢墓の清理」『考古学報』1957-1
 中国社会科学院考古研究所・河北省文物管理处 1980 『滿城漢墓発掘報告』文物出版社
 広西壮族自治区文物工作隊 1981 「広西合浦県堂排漢墓発掘簡報」『文物資料叢刊』4 文物出版社
 南京博物院 1981 「江蘇邗江甘泉二号漢墓」『文物』1981-11
 范世民・周宝中 1983 「館藏部分玻璃制品的研究—兼談玻璃史的若干問題」『中国歴史博物館館刊』5
 安家瑶 1984 「中国的早期玻璃器皿」『考古学報』1984-4
 建築材料研究院・精華大学・中国社会科学院考古研究所 1984 「中国早期玻璃器檢驗報告」『考古学報』1984-10
 安家瑶 1986 「中国的早期 (西漢—北宋) 玻璃器皿」『中国古玻璃研究 (1984 年北京国際玻璃學術討論會論文集)』中国建築工業出版社
 黄啓善 1986 「広西漢代玻璃制品初探」『中国古玻璃研究 (1984 年北京国際玻璃學術討論會論文集)』中国建築工業出版社
 黄森章 1986 「広州漢墓中出土的玻璃」『中国古玻璃研究 (1984 年北京国際玻璃學術討論會論文集)』中国建

築工業出版社

周世栄 1986「湖南出土の琉璃器の主要点及其重要意義」
『考古』1986-2

楊伯達編 1987『中国美術全集』工芸美術編 10 金銀玻璃
瑠瑠器 文物出版社

徐州市博物館・南京大学歴史系考古專業 1988「徐州北
洞山西漢墓發掘簡報」『文物』1988-2

王正書 1988「上海福泉山西漢墓群發掘」『考古』
1988-8

黄啓善 1988「広西古代玻璃制品の発現及其研究」『考古』
1988-3

李銀徳 1990「徐州発現一批重要西漢玻璃器」『東南文化』
1990-2

揚州博物館 1991「江蘇邗江渠甘泉老虎墩漢墓」『文物』
1991-10

黄啓善 1992「広西発現的漢代玻璃器」『文物』1992-9

徐州市博物館・南京大学歴史系考古專業 2003『徐州北
洞山西漢楚王墓』文物出版社

関善明 2001『中国古代玻璃』香港中文大学文物館

李琴 2004「考古碩果 建設豊碑—“河南重点項目和基本
建設考古成果展”簡紹」『中原文物』2004-1

広西壮族自治区文物工作隊・合浦県博物館 2006『合浦
風門嶺漢墓—2003~2005 年發掘報告』科学出版社

広西壮族自治区文物工作隊・貴港市文物管理所 2006「広
西貴港深釘嶺漢墓發掘報告」『考古学報』2006-1

河南省南陽市文物考古研究所 2008「河南南陽市陳棚村
68 号漢墓」『考古』2008-10

齊東方主編 2010『中国美術全集』金銀器玻璃器 黄山
書社

熊昭明・李青会 2011『広西出土漢代玻璃器的考古学與
科技研究』文物出版社

広西文物考古研究所・合浦県博物館・広西師範大学文
旅学院 2012「広西合浦寮尾東漢三国墓發掘報告」『考
古学報』2012-4

熊照明 2015『漢代合浦港考古與海上絲綢之路』(広西
文物保護與考古研究所學術叢書 8) 文物出版社

広西文物保護與考古研究所編著 2017『広西合浦文昌塔
漢墓』文物出版社

<モンゴル語>

Эрдэнэбаатар Д., Идэрхангай Т., Мижиддорж Э.,
Оргилбаяр С., Батболд Н., Галбадрах Б., Маратхаан
А., 2015, *Балгасын тал дахь гол мод-2-ын хуннугийн
язгууртны булины судалгаа*, УБ: Мөнхийн Үсэг. [エル
デネバータル D.・イデルハンガイ Т.・ミジドルジ
Ye.・オルギルバヤル S.・バトボルド N.・ガルバドラ
フ B.・マラトハーン A.『バルガスイン^{キル}平原所在のゴル
モド II 匈奴墓地』]
Эрдэнэбаатар Д., 2016, *Хун улсын соёлын өв*, УБ: Мөнхийн

Үсэг. [エルデネバータル D., *The cultural heritage of
xiongnu empire*]

<英語>

Erdenebaatar D., Iderkhangai T., Galbadrakh B.,
Minzhiddorzh E., Orgilbaier S., 2011, Excavations of
satellite burial 30, tomb 1 complex, Gol Mod 2 necropolis,
*Xiongnu archaeology multidisciplinary perspectives of
the first steppe empire in Inner Asia, (Bonn contributions
to Asian archaeology 5)*, Vor- und Frühgeschichtliche
Archäologie Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität
Bonn.

図版出典:

図1 広西壮族自治区文物工作隊ほか 2006 p.2 図1を
下図として筆者作成。

図2 地図は著者作成。1-1: 曾布川・谷編 1989 p.253,
PL.168 上、1-3: 同上 p.253, PL.168 下、2: 徐州市
博物館ほか 2003 彩版 62-1、3: 広州市文物管理委
員会 1955 図版 6-1、4: 河南省南陽市文物考古研究
所 2008 p.37 図版 2-4、5: NHK 大阪放送局編 1992
PL.60、6-2: 熊・李 2011 図版 9-2、7: NHK 大阪放送
局編 1992 PL.59、9-1: 広西壮族自治区文物工作隊ほ
か 2006 図版 5-2、10: 曾布川・谷編 1989 PL.165、
11: 熊・李 2011 図版 8-1、12: 由水編 1992 図版
27、14: 熊・李 2011 図版 9-4、15: 曾布川・谷編
1989 p.255, PL.173、16: 齊東方主編 2010 p.401 上、
17-1: NHK 大阪放送局編 PL.63、17-2: 同上 PL.64、
18-1,2: 曾布川・谷編 1989 PL.166、21: 李琴 2004
封裏写真 -3、23-1: エルデネバータルほか 2016 p.44
右下、23-2: 同上 p.44 左下、24: 同上 p.40

図3 1-1: 中国社会科学院考古研究所ほか 1980 p.214
図 142-2、1-2: 同上 p.214 図 142-1、2: 徐州市博物
館ほか 2003 p.134 図 108-2、河南省南陽市文物考
古研究所 2008 p.37 図 7-5、5: 黄啓善 1992 p.46 図
1-1、7: 熊・李 2011 p.67 図 7-2、9-1: 広西族自治
区文物工作隊ほか 2006 p.106 図 19-1、10: 熊・李
2011 p.67 図 7-3、11: 黄啓善 1992 p.46 図 2-1、13:
揚州博物館 1991 p.67 図 10-8、14: 広西文物考古研
究所ほか 2012 p.530 図 43、17-1: 黄啓善 1988 p.267
図 3-5、17-2: 黄啓善 1992 p.46 図 2-2、18-1,2: 黄啓
善 1998 p.267 図 3-1

図4 左: Erdenebaatar D. et al. 2011 p.304, Fig.2、右上:
エルデネバータルほか 2015 p.179, 5-2, 5-3、右下:
同上 p.179, 5-4.

本稿は日本学術振興会特別研究員 PD としての研究成果
の一部である。